

# 隨泉寺寺報

平成28年（2016年） 4月号 第548号

Tel.082-892-0217 <http://www.zuisenji.com>

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

## 春季永代経法要

講師 圓光寺住職 安部 敏孝師

講題 『おおいなるもののちから』

「すでにこの道あり。」親鸞聖人『教行信証』

春の訪れを日に日に実感する季節を迎えました。この季節はまた、それぞれの方がさまざまな道へとその新たな一歩を進める季節でもあります。これから広がる歩みに心踊らせる人、必ずしも自分の意に添わない現実と直面して途方に暮れる人、それぞれの方がそれぞれの現実のなかで、期待や不安など様々な思いを持つことでしょう。この時期にいつも思われるのは、それがどんな現実であったとしても、目の前の現実のうちに自分自身が歩むべき道を見出し、その道を歩もうとする決断と意欲とを自らに確かめていくことの大切さです。

### 4月の法座予定

- 4月 2日……………本部役員会
- 4月 14日……………掃除 高部
- 4月 15日朝席午前10時より……………春季永代経法要
- 4月 15日朝席終了後……………仏婦総会 おとき
- 4月 15日昼席午後1時より……………春季永代経法要
- 4月 15日昼席午後3時半より……………門信徒会役員総会
- 5月 2日午後5時より……………門信徒会本部役員会

☆浄土真宗本願寺派前門主 大谷光真著「あけぼのすぎ」

—浄土真宗一口法話—

4月

「念仏はわが家のきずな 御同朋への道しるべ」（高島正信）

四月の本願寺は、お釈迦様のご誕生を祝う花まつりや新入学入園の団体、家族と、若い方々の参拝がつづきます。阿弥陀如来さま、親鸞さまに照らされ、励まされて新学期を始めてほしいものです。とりわけ、初めて家庭から保育園幼稚園に通う子ども達、親元を離れて高校や大学に通う人たちには、ご本人の緊張とともに周囲の心配もあることでしょう。温かく、見守りたいものです。



昔と較べて、今日の家庭は様子が変わっていますが、子どもの成長にとっては言うまでもなく、大人にとっても家族の存在は重要であります。それは単純な利害を超えて、人間同士が支え合うからです。しかし、現実には、深刻なことから、些細なことまで、口論の種は尽きません。そうであるからこそ、朝夕のひとつとき、家族がお仏壇の阿弥陀如来さまに向かってお念仏することに深い意義があります。



お互いに顔を向き合わせ、会話することも大事ですが、揃って同じ方向に顔を向けることも大切です。一緒に、阿弥陀如来さまを仰ぐこと、お念仏申すことから、御同朋、御同行との思いが育つのではないのでしょうか。

もし、一人暮らしの方がいらっしゃったら、懐かしい方と、あるいは、世界の人々とご一緒にお参りしているという広い心を持っていただくことができれば、素晴らしいことです。



### ☆ 婦人部総会

門信徒会婦人部の総会を開催します。4月15日永代経法要の朝席終了後平成28年度婦人部総会を例年の如く開きます。平成27年度の事業報告や会計報告、並びに平成28年度の事業計画や予算等を審議していただきます。誘い合わせてご参加ください。

## 一番はもちろん尊い しかし一番より尊いビリがある

東井先生は子どものころから、体はあまり丈夫ではなかったようです。「私は、生まれつき、いわゆる腺病質体質というのであったようで、村のおばさんたちが『お寺のぼんちゃんは、お気の毒だけど、とても三十歳まではよう生きなさらんだろう』と噂していたと聞いています」と述べられています。次の文章は、一九二七（昭和二）年、兵庫県の姫路師範学校に十五歳で入学されたときの思い出です。入学した以上は、必ず何か運動部に入らなければならないということで、いくつかの運動部の門を叩かれたそうです。



はじめ、サッカー部の入部検査を受けました。山の中の、貧しく小さな小学校で育った私には、あんなボールを蹴らせてもらうのは初めてでした。（中略）次は、野球部でした。生まれてはじめて、バットというものを握りました。なぜ、球が当たりやすいように平らにしておかないのか、こんなツルツルした丸太ン棒を、飛んでくる球に当てるなんて、まるで奇術ではないかと思ひながら、バットを振りましたが、やはり、球は当たってくれませんでした。次は、庭球部でした。ラケットを握るのも初めてでしたが、これは、球が当たるよううまくできていると、感心しながら振りましたが、見事に空振りではねられてしまいました。



次は、水泳部でした。プールの波が光っているのを見ると、おそろしくなって、尻込みしている私を、水泳部の上級生が、無理やりプールに突き落としました。カナヅチが浮く道理がありません。溺れてしまった私を、上級生が大あわてにあわてて引き上げてくれました。次は、競走部でした。これは溺れるはずがありませんから、少し、安心しました。百メートル走らされましたが、びりでした。「チョコイチご飯」を食べて育った栄養失調の私には、人並みに走れるだけのエネルギーもなかったのでしょうか。「おまえ、なーんにもあかんのやな」と、上級生たちが、あきれ顔で申しました。

その私を、気の毒そうに見ていた上級生の方が、「おまえ、辛抱強く粘ることはできるかい」と、尋ねてくれました。「はい、粘ることならできると思います」と、答えましたら、「そうか、それではマラソン部にとってやる」といつてくれ

ました。やっと、私の落ちつくところが決まったのでした。「よし、粘り抜いてやろう！」と、一大決心をして、入部させてもらいました。

放課後、他の部員たちと一緒に、姫路の城北練兵場をとり囲む道を一周して帰るのが、毎日の日課でした。マラソンも、ただ粘ればよいというものではなく、毎日、私が、ビリッコを独占することになりました。練兵場一周は五千メートルということでしたが、週一日は、市川の鉄橋まで往復、というのがありました。これは、一万メートルだということでした。この一万メートルコースの途中に、キリスト教の女学校がありました。大勢の女学生たちが見ている前を、仲間から何百メートルもおくれて、犬に吠えられながら走るの、鈍感な私にも、ほんとうに、つらいことでした。

（中略）ビリッコを走りながら、毎日、考えたことは「兎と亀」の話でした。あの話では、亀は兎に勝ちました。けれども、兎が亀をバカにして、途中で一眠りしたりするものだから、たまたま、亀が勝ったにすぎません。いくら努力しても、亀は、どこまでいっても亀で、走力は、とても兎には及びません。ですから、あの話は、ねうちのある亀は、つまらない兎よりは、ねうちの上では上だという話ではないかと考えました。亀は、いくら努力しても、絶対、兎にはなれない。しかし、日本一の亀にはなれる。そして、日本一の亀は、つまらない兎よりも、ねうちが上だという話ではないかと考えるようになりました。



そして、私も「日本一のビリッコ」にはなれるのではないかと、考えるようになりました。「よし、日本一のビリッコになってやろう」と、考えることで、少し勇気のようなものが湧いてくるのを感じました。そのうちに、また、気がつきました。「もし、ぼくがドリッコを独占しなかったら、部員の誰かが、このみじめな思いを味わわなければならない。他の部員が、このみじめな思いを味わうことなく済んでいるのは、ぼくが、ビリッコを独占しているおかげだ」ということに気がついたのです。「ぼくも、みんなの役に立っている」という発見は、私にとって、大きなよろこびとなりました。世の中が、にわか、バツと明るくなった気がしました。そして「教員になつたら、ビリッコの子どもの心の解ってやれる教員になろう。とび箱のとべない子、泳げない子、勉強の解らない子どもの悲しみを解ってやれる教員になろう。『できないのは、努力が足りないからだ』などと、子どもを責める教員にはなるまい」と思わずにはおれなくなりました。

